

54th

CONCERTINO di KYOTO

第54回 コンチェルティーノ ディ キョウト 定期演奏会

2012 11.11 (日) 14時

京都コンサートホール(小)

主催 才能教育研究会京都支部

J.S.バッハ

フーガ ト長調 BWV.541

A.コレルリ

合奏協奏曲 作品6-3

B.ガルツピ

4声の協奏曲 第2番 ト長調

C.P.E.バッハ

シンフォニア ト長調 Wq.182-1,H.657

G.F.ヘンデル

合奏協奏曲 作品6-10

指揮 江村 孝哉

コンチェルティーノ・ディ・キョウト

才能教育研究会京都支部の最上級生で構成される弦楽合奏団で、昭和34年の結成以来年1回の定期演奏会を開催し、また卒業演奏会において伴奏を担当。過去にモーリス・ジャンドロン(チェロ)ルイ・モイーズ(フルート)フェリックス・アーヨ(ヴァイオリン)といった演奏家と共演してきた。

Vn	村山 直	西田 知代	清水 円	佐々木めぐみ
	大下 瑛耶	井狩 苑子	上田 彩希	南部 史
Vla	江村 美由紀	仲佐 悦子		
Vc	森田 健二	田村 忠司		
Cb	宮澤 由佳(客演)			
Camb	永田 悦子			

曲目解説

J.S.バッハ フーガ ト長調 BWV.541

「音楽の父」と言われるヨハン・セバスチャン・バッハ(1685-1750)は、後期バロックを代表する最も重要な作曲家の一人。バッハの家系は中部ドイツの音楽家一族で、彼は8番目の子(末子)としてアイゼナハに生まれた。ヘンデルと共にバロック音楽の最後を飾る音楽史上最大の音楽家の1人であり、ポリフォニー(複旋律音楽)の完成者で、フランク、ベートーベンとともに「ドイツ三B」ともいわれている。当時、画家や音楽家という職業を子孫に受け継ぐ、というのは珍しいことではなく、現代のような「芸術家」という概念がまだ生まれておらず、画家も音楽家も、貴族や王侯に使える「職人」という位置づけであった。したがってバッハの家系に音楽家が多いのは固定された身分制度のために音楽家という家業が世襲されたという側面が強いといえる。バッハは、ある時、一族の中から有名な音楽家を50人選び出した家系図を作り、それによると、初代はファイト・バッハ(1619年没)という人にて、セバスチャン自身は11代目のヨハン・アンブロジウスの息子であり、24代目となっている。彼の息子たちも音楽家として活躍しており、45代目以降は全員息子たちの名前が記されていて長男のヴィルヘルム・フリーデマンは45代目、次男のカール・フィリップ・エマヌエルは46代目、そして末子であるヨハン・クリスチャンが最後の50代目。バッハ家でもっとも偉大であるという意味で「大バッハ」という呼び名も使われる。

A.コレルリ 合奏協奏曲 作品6-3

イタリア北部ラヴェンナ近郊のフジニャーで生まれたアルカンジェロ・コレルリ(1653-1713)は、13歳から当時イタリアの音楽教育の拠点のひとつであったボローニャでヴァイオリンを学び、わずか17歳で同地のアカデミア・フィラルモニカに正会員として迎えられた。このアカデミアへの入会は原則として20歳以上でなければ認められず、10代で特例として入会が認められたのは、100年後のモーツァルトのみであったことから考えても、コレルリがいかに若いときから才能を発揮していたかが伺える。当時のバロック期は器楽音楽が発達した時代であり、その中でもヴァイオリン族の楽器は時代を代表する楽器とすることができよう。特にバロック中期、イタリアでストラディヴァリやアマティ・グアルネリといった名工たちが優秀な楽器を作り出した時代は、同時にヴァイオリンのための音楽が新たに作り出されていった時代でもあった。1709年まではコレルリがサン・ルイージ教会の儀式のありなどに、なんらかの演奏活動を行っていたことが記録からわかっているが、1710年のはじめからは公衆の面前にあらわれる事なく、第一線を退いて作品6の合奏協奏曲集の出版作業に取りかかり、その出版(1714)を見届けることなく1713年の1月に60歳でその生涯を終える。コレルリはローマのパンテオンに埋葬された。

B.ガルツピ 4声の協奏曲 第2番 ト長調

バルダッサール・ガルツピ(1706-1785)はイタリアの"オペラ・ブッフア"(コミック・オペラ)で知られている作曲家である。小さい頃から床屋でヴァイオリン奏者だった父からヴァイオリンを習い、作曲をヴェネツィアのA.ロッティに師事した。1728年頃からヴェネツィア劇場のために多数のオペラを書いたが、29年作の「ドリンダ」で名声を築き、41年にイギリスに渡り、ロンドンで「ベネロブ」や「エンリコ」を上演して大成功を収めた。その後、48年からヴェネツィアの聖マルコ大聖堂の副楽師長を務め、62年から同聖堂の楽師長とヴェネツィア音楽院長に就任した。66~68年はロシアの女帝エカテリーナ二世に招かれてペテルブルクのロシア宮廷の楽師長を務め、そこでオペラ「タウリスのイフィゲニア」を書き、68年にペテルブルクでこのオペラの初演を行なった。帰国してからは聖マルコ大聖堂に復職する。さらに、彼はオペラの作曲家として有名ただけではなく、ヴェネツィアで慈善団体や宗教団体の公職にも就いており、宗教音楽も多く残している。鍵盤楽器の名手としても知られ、鍵盤楽器のための作品も残している。したがって、彼はヴェネツィアでは尊敬の対象だったのである。しかし、彼の死後、彼のことはほとんど忘れ去られてしまった。78歳でこの世を去ったガルツピだが、彼の生まれ故郷のブラーノ島の中央広場には彼を記念する彫像が据え置かれており、また中心部に向かう通り名はガルツピ通りである。

C.P.E.バッハ シンフォニア ト長調 Wq.182-1,H.657

大バッハの次男、カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ(1714-1788)は、当時は父親よりも有名で、兄弟の中では誰よりも世俗的な成功を収めたが、兄弟のなかでは誰よりも父親への敬意とバッハ家の音楽的・宗教的伝統への忠誠を強く自覚し続けていた。その意味においては、初期のバッハ神話を創り出した張本人であったと言える。バッハの弟子とともに残した「故人略伝」は生前のバッハのことを知る貴重な資料となっている。ヨハン・セバスティアンの息子たちのうち4人が有名な作曲家になり、それぞれが父親とは違った魅力を持った音楽を作っている。バロック時代から古典派のはざまにあたるこの時代(音楽史的には「前古典派」)「多感様式」と呼ばれる彼らの作風は、激しい転調が特徴的で、バロックとも古典派とも違う過渡期の荒削りながらユニークな音楽で、ハイドンやモーツァルト、ベートーベンに大きな影響を与え後の古典派へとつなげる音楽史の潮流を作り出したという意味で重要な位置を担っている。18世紀後半では「大バッハ」といえばエマヌエルのことを指し、バッハは一般には「エマヌエルの父で昔風の音楽を書いていたオルガン、チェンバロ即興演奏の名人」ぐらいにしか認められていなかった。

G.F.ヘンデル 合奏協奏曲 作品6-10

ゲオルグ・フリードリヒ・ヘンデル(1685-1759)はドイツ生まれでイギリスに帰化した作曲家でバッハと並んでバロック期を代表する重要な作曲家の一人。彼は生涯の約3分の2をイギリスで過ごしており、イギリスでの活動歴が圧倒的に長い。同年生まれのバッハとは同時期に活動しながら顔を合わすことはなかった。コレルリが形式の基礎を固めた合奏協奏曲(コンチェルト・グロッソ)はクラヴィーア組曲やトリオンナタなどと並んでバロック時代特有の音楽形式である。コンチェルトイーノと呼ばれる独奏楽器群とリピーエノと呼ばれる合奏からなり、コレルリの作品に典型的な実例を見ることが出来ます。ヘンデルの作品も、様式的にはコレルリの流儀にならってはいるが、シンフォニックな豊かな響きや強弱の鋭い対比、音楽の劇的な転換、即興的な自由さなどがヘンデルならではの斬新さといえる。